

哲學研究

第四十五號

第四卷
第十二冊

山崎闇齋の學說

高瀨 武次郎

山崎闇齋先生は最も熱心なる朱子學信奉者なり。徳川時代三百年間には朱子學を信奉せし者非常に多けれども、闇齋先生の如く、高く標榜し篤く信仰したる者はあらざるなり。先生は初め土佐の鴻儒小倉三省、野中兼山より四書及び程朱の書を授けられて、専ら濂洛を祖としたれども、晩年に神道を雜へ修むるに至つて他の程朱學者と其の趣を異にするに至れり。玉木正英は先生の著に係る中臣祓風水草管窺の後に題して謂へらく、垂加靈社は深く神道の淵源を探り、博く鹽土の口訣を索む、寛文九年秋中臣祓の奥祕を伊勢大宮司大中臣精長に受け、十一年冬、卜部家神道の宗源を吉川惟足に聞けり。惟足は嘗て侍從兼從朝臣に受く、朝臣は天兒屋命五十三傳直授相承なり。然るに卜部の徒は異國の道を以て之に習合する者あり、靈社之を傳へしより、之を削り之を正だして而後に其舊に復すとを得たり、同年十一月廿二日庚午

冬至、先生を號するに垂加靈社を以てす、惟足手づから書して之を贈れり、神垂以祈禱爲先、冥加以正直爲元の神語に取れるなり、其の書は悉く存して下御靈神主の許に在り。是に於て靈社は敢て衆説を會して疑はしき者は之を闕ぎ、畧せる者は之を詳かにし、頗る發明する所多くして集大成を得たり。晩に風水草一篇を著はし、中臣祓及び神道の奥義を述べ、審説明辨、至れり盡くせり云々と。是れ即ち、先生が神道に於ける經歷の概要なり。先生が熱心なる程朱學者にして而かも雜ふるに神道を以てしたるは所謂閻齋學てふ一家の説を立てたる所以にして亦た程朱學を討究したる後に之を日本化するに力を注ぎし所以なり。唯だ終生何等の異説を創唱せずして専ら程朱學を墨守したる所謂朱子學者に比較すれば固より雜駁の評を免かれざるべし。然れば先生が程朱學派の祖述者として講説せし所は殆ど一字一句をも違へざる信奉的態度を示し、門人等に命ずるにも師説を嚴守することを以てし。門人等も大抵孜孜として師の講義を筆記し之を繼承するに意を用ひたり、故に今日に傳はる筆記類を見るも閻齋學派に屬する者は自ら一種の特徴を有し一瞥して之を區別するを得るなり。是れ即ち先生の門には何人も師説を嚴守するを以て講學の大方針と定めたるが爲めなり。閻齋學の大に世に行はれときは之に歸する者頗る多く、

前後、贊を執る者は六千餘人に上れりと云ふ、然れども先生が神道を奉するに及びては高第の弟子佐藤直方、淺見綱齋其餘、之れに反く者も亦た甚だ多し。蓋し先生が晩年神道を奉するに至れるは其の思想上の一大變動にして之を進歩發展と見るべきか、或は之を程朱學に雜ふるに神道を以てする雜學と見るべきか、又た其の神道的論說の方面には唯だ純粹に程朱學を學修せる者には到底首肯し難き稍迷信に傾ける部分も存するが如くなれば先生の高弟には之に反對する者あるは勢止むを得ざる所なるべし。先生は程朱學を放棄し去つて神道に歸したるには非ずして程朱學を奉しつゝ之を資として神道を討究解説し遂に以て神道の中興と爲りたるは即ち儒學を日本化したる者と謂ふべく或は又た日本固有思想の源泉とも見るべき古事記神代卷及び中臣祓等を解説するに支那の哲學思想を用ひたる者と謂ふべきなり。此の點に於て先生は哲學と宗教とを混融して一家の説を立てたる者にして餘他の儒學者と大に色彩を異にする所なり。凡そ徳川三百年間の儒學者は最初程朱學より入らざる者殆ど希なり、藤原惺齋、林羅山以下林家の諸士は言を待たず、率先して古學の旗幟を翻したる山鹿素行も、古學先生として堀川學派を開きたる伊藤仁齋も、我邦陽明學派の開祖たる中江藤樹も、又た古文辭學派即ち徂徠學派の祖たる物徂徠も、

其他、折衷學者も考證學者も、詩人も文人も書家も皆な程朱學を學修して其の素養を成し、然後に各自其性に近き所を選びて其の方向を決したる者なり。徳川初期に於ては碩學鴻儒輩出して各方面に崛起したるも未だ閻齋先生の如く日本化せる新説を創唱したる儒者はあらざりしなり。先生の旗幟の鮮明にして後世に功ある所は實に此點に存するなり。先生は熱心なる程朱學者なれども周易に於ては程伊川の易傳と朱子の本義とは異なる説あり、伊川は占筮の書とせずし専ら義理を以て説けども、朱子は義理と占筮兩者を合せて采りたれば周易啓蒙を著はして占筮の説を詳示せり、而して閻齋先生は全然朱子の説を奉して易を説けり、然れども閻齋も亦た朱子を盲信する者に非ずして朱子が周濂溪の大極圖説に解釋を附したるを見て之を疑ひ、常に心に懸けたれば閻齋嘗て夢に周子を見て之を質す。文會筆録に記して曰く、嘉嘗て周子書を編次す、意謂へらく、太極圖説の朱解は理に於ては則ち固より可にして不可なし。但だ知らず周子の本意果して此くの如きや否や、辛卯の夏四月二十一日夢に周先生を見る、乃ち問ふ、太極の朱解は尊意に違ふことなきか、曰く、違はず、曰く、或は第一圖中に點す、尊意を失ふ者あらんと、先生之を頷す、又た將に編次する所を正さんとす、而して人呼び覺ませり」と。

闇齋先生の垂加神道は自ら特徴を有するものにして他派の神道とは同しからざるものあり、垂加の二字の起原は其の遺著、垂加社語に示せり、其語に曰く、神垂シツヂ以テ祈禱ヲ爲ス先ト冥ト加ヘ以テ正直ヲ爲ス本ト。此の神託は鎮座傳記、寶基本記、倭姫世記に出でたり。先生は終身變することなく、神垂祈禱、冥加正直の説を守れり、神垂とは蓋し神の髣髴として來格し垂示さるゝをいふならん、其の神垂は一心祈禱の力を以て第一とすることを云ふ。然れば神に對しては祈禱を爲すを最要とし、冥冥中の援助を加へらるゝことは行爲の正直を以て緊要と爲す、此句は倭姫世記に日月は四洲を廻りて六合を照らすと雖も須らく正直の頂を照すべしと云へる所に參考すれば直ちに了解すべけん。諺にも神は正直の頭に宿ると云ふあり、蓋し亦た此意なり。先生は學者にして又た宗教家なれば程朱學と同時に神道を信奉して自ら修行し又た人をして修養せしめたるなり。

先生の神道の根本思想に左の如きものあり、先生曰く、我が神道に四あり。造化、氣化、身化、心化なり、造化と心化とは無形なり、氣化と身化とは有體なり、此れ神道を學ぶ者の當に知るべき所なり。又曰く、天神七代は造化の神なり、地神五代は身化の神なり、伊弉諾尊、伊弉册尊は造化氣化を兼ねるの神號なり、卜部が未生の伊弉諾伊弉册已

生の伊弉諾、伊弉冊の説は正に此を謂ふなり、未生とは則ち天の陰陽造化の神なり、己生は則ち人の男女氣化の神なり、二尊は國土山海草木を生む而して天照太神を生む、此れ天人唯一の道なり」と又曰く、天神は國常立尊なり、地神は天照太神なり、天地交互にして之を號する者なり。「伊弉諾尊、伊弉冊尊は天神の終に在りて地神の始を生む、天地の神を兼ねるなり」。二尊は天の浮橋の上に立て磯敷盧島に至る、此れ天の陰陽和合の道を言ふなり、二神は彼島に降り居りて而して下る、此れ人の男女和合の道を言ふなり、或は未生を以て己生を言ひ、或は己生を以て未生を言ふ、皆な天人唯一の理を明かにする所以なり」と。又曰く、陰陽が國土山海草木を生む、二神は子を生みて之を治む、天照太神曰く、父母が諸子を任む、各々其の境ありとは是なり、又曰く、陽神は上りて天を主どり、陰神は下りて地を鎮む、伊弉諾尊の神功己に了りて天に還る、伊弉冊尊は火神を生みて地に歸る、其義は炳かなり、源親房の東家秘傳に之を發せりと。

又曰く、高天原に生む所の神を名けて天御中主尊と曰ふ、次は高皇產靈尊、次は神皇產靈尊なり、天御中主尊とは天地一氣の神體なり、

以上の語に徴するに間齋先生は天地開闢論に於て、造化氣化身化心化の四種を説き、開闢の初に天地一氣の神體を天御中主尊と名け此神を宇宙最初の神として高皇

産靈尊、神皇産靈尊と漸次諸神生れ給へるものとす。其中に於て天神七代は造化の神なり、地神五代は身化の神なり、伊弉諾尊、伊弉册尊は造化氣化を兼ねるの神なりといふ。心化に就きては中臣祓風水草管窺に玉木正英曰く、正英聞く、攝津國住吉社底筒男命、中筒男命、表筒男命、祓の時に心化し給ふ神なりと。朱子は宇宙造化を説くに形化と氣化とを唱へたるが、闇齋は更に造化身化心化を加へて四道と爲せり、蓋し天地の諸神を論するに當りて案出したるものなり、且又五行を説けることも朱子が太極圖説解にも既に見ゆるのみならず、五行説は古來普く用ひられたるものなれば闇齋は我が天地諸神を五行に配當して説きたるなり、闇齋曰く、天神第一代は天地一氣の神なり、二代より六代に至るまでは此れ水火木金土の神なり、此七代は則ち陰陽の神なり。猶ほ闇齋が中臣祓風水草、神代卷風葉集、垂加草等に説く所に創説少からざれども今逐一之を論するの暇なし、唯だ其の學風の一斑と垂加神道の一部分とを示さんとするのみ。先生の垂加神道を討究する間に往々神秘奥妙に入りて吾人の考究思索に間斷を起さしむる所なきにあらず、其の神秘奥妙なる所は即ち先生の信仰の熱烈なる所にして冷靜なる研究者の追隨を容れざる所なり、然れども又能く先生の説を信奉して熱烈なる信仰を生ずる者には此の間斷なくして之を味ふことを得

るならん、崎門の學を傳へ垂加神道を信奉したる者には後世有爲の士を輩出せしは人の知る所にして先生が他の朱子學者の徒に糟粕を嘗め尋章摘句に汲々たりしと大に異なる點なり先生が神祕奧妙に直進せし所に其熾烈なる精神は籠れるなり。光海翁源良顯が風水草管窺に序して曰く、妙哉大哉、天御中至尊の宇宙に充滿して一息の間斷なく、一處の空闕なき者は吾國天人唯一の道なり、乾道獨立して三神現はれ、乾坤相參はりて八神生ず、瓊矛已下、國柱爰に立ち遂に天柱を高天原に擧ぐ、是を以て日神は四海を照臨し八紘を覆育し玉ふ、生民永く頼り、萬物其の所を得、人倫斯に明かに風化斯に淳く災害攘除し、不淨は生せず、安國と爲ることを得、萬世無窮の久き、皇孫は日神と明を合はせ徳を齊うし、神器は位を正す、皆此祓の徳なり云々と、是れ即ち光海翁の文にして闇齋先生の意なり、斯かる思想は我神國の根柢と爲り國民道德の基礎を爲す者なり、忠君愛國敬神の念は闇齋が特に意を用て鼓吹せし所後の此學を窺ふ者須らく此點に着眼すべし。(完)